

それから同じ年の八月二十七日、二百二十六枚のときです。大阪朝日新聞社が東京と大阪との間に日本で初めての旅客空輸を始めることになり、その第一便が飛び立ったのですが、私はその第一便に乗ったのです。妹は入院こそしておれ、別に飛行機に乗ってまで見舞いに行くほどのことはなかったのですが、朝日新聞社の京都支局に本郷基継さんという知人がいて、今度の第一便には、各府県から一名ずつ代表を乗せるようにしたいというので、それは私が行くと軽く承知したのでした。第一便の記念飛行というので大阪で知事さん、市長さん、師団長さんなどはじめ、多くの人たちが歓送会をされたものでした。そして私は飛んでいる飛行機の中で妹に、二百二十六枚目のはがきを書いたのです。同乗しておられた朝日新聞社の社会部の記者平井常次郎さんが、「私が病める妹に飛行機型の文字を書いて見舞いの手紙を書いてい
る・・・」と新聞に書いておられるのです。飛行機型の文字といえば速記文字で書いているのだろうと思
われるけれどもそうではなく、次のようなものを書いていたので。そしてこれを記念のため、同乗して
おられた平井さんをお願いしてポストに入れていただいたのです。